

光源氏の藤 源氏物語より「贈答歌」 浄瑠璃に写す藤波(紫文字、源氏物語文)

名にしおう 源氏ゆかりのむらさきの 色に伝えん(もの思ひ)

① 見て もお また お(逢)ふよ

まれなる 夢のうちに

やがて まぎるる わが身 とも がな

(合)

藤の はなふさ ゆれてゆられ

え； もの おもふ

水面みなもに うつし ゆれて

ゆらり ゆらり(と) 藤のふさ

(合)

② 世か(ガ)たりに 人や 伝えん

たぐひなく うきみを さめぬ

夢に なしても

(合)

③ すいたる ひと は 心から

やすかる まじき わざなりけり

(合)

④ 月蔭に なよびたる 風につきて

さつと におふが

なつかしく そこ はかと なぎ

かおりなり

はや たそがれの夕暮れに

尾張 津島の花の藤浪

合

「やまごころの

栄ぞと

祝詞ける」

①④は源氏物語の古文です。左記に現代語訳をつけておきました。

① 逢ってもまたふたたび逢うことは、めったにない逢瀬の夢の中に

そのまま紛れて 消える身になりたいですよ（光源氏）

② 世間の噂に人が語り伝えるのではないのでしょうか。比類なくつらいわが身を醒めない夢にしてしまったとしても（藤壺）

③ 風流を好む人は、心から安心を得ることはむつかしい（蓬生巻・玉鬘）

④ （大きな松に藤が咲きかかって）月の光の中で揺れていて、風に乗ってふとにおうのが慕わしく あるか無きかの香りである。

（真木柱巻・未摘花）